ISSN 1880-585X

sendai-city chronicles communication paper.

せんだい 市史通信

第35号
仙台市博物館
市史編さん室

大正時代の四ツ谷用水本流（仙台市博物館所蔵）
左：現在の東北大学病院北側付近
上：堤通より西を望む

せんだい 今 昔
水巡る～仙台の歴史とともに

「桜川」と記された古い水路の写真があります。桜川とは、北六番丁を東へ流れていた四ツ谷用水の本流の、もうひとつの名前です。

暮らしや生業に必要な水を得るため、人々は河川に堰を作り水路を引きました。仙台市域においても、西側の丘陵から東の平地にかけていくつもの水路が網の目のように流れています。

そのなかのひとつである四ツ谷用水は、江戸時代初期に開削されたといわれています。宮城郡郷六（現在の青葉区郷六付近）に作られた堰から広瀬川の水を取り入れた水路は幾筋にも分流し、水は城下全域を流れました。その本流である桜川は、城下の北側・北六番丁を東流し、小田原で平渡戸川と名を変えたのち、苦竹で梅田川に合流します。

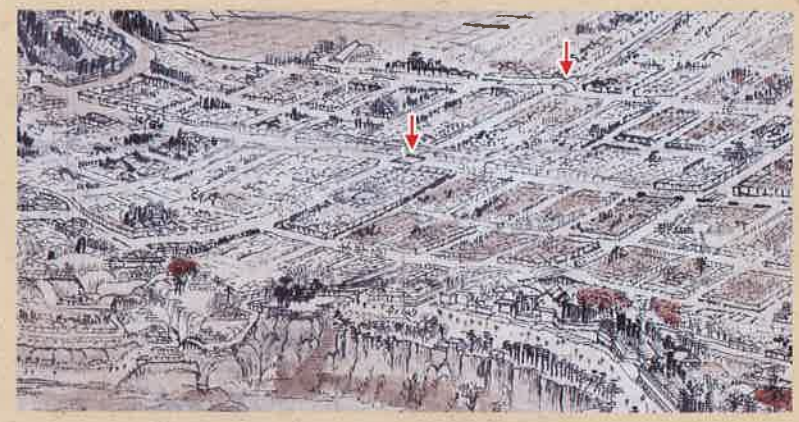
四ツ谷用水が整備されて作られた仙台城下町。しかし、それ以前の仙台の景色はまるで違っていました。

伊達政宗によって城下町がつくられる以前の地勢は、『東奥老士夜話』という資料のなかに「榴ケ岡から西の広瀬川あたりまでは葦原の野谷地で、北二番丁から北は湿地である」と記されています。仙台城下は長町・利府断層の西部に位置する仙台中町段丘と仙台上町段丘上に展開しています。西から東に向かってゆるやかに傾斜した台地に、微高地が複雑に入り交じる地形から考えると、行き場のない雨水や湧水が作り出した湿地が点在するような風景だったのでしょう。

そのような土地に建設された仙台城下町にとって、四ツ谷用水はなくてはならないものでした。水路により運ばれた水は地中に浸透し、人々に必要な井戸水の水源となりました。また、雨水は水路に集まって下流へ流され、余分な水が滞留することもなくなりました。

しかし、都市化にともなってしだいに衛生上の問題が生じるようになります。特に近代以降は、生活廃水や工場からの廃水も流れ込み、悪臭が発生するなど生活環境の悪化をもたらしました。そのため、地下に導管を設置して水路とする暗渠工事が進み、昭和30年代までに市街地を流れる四ツ谷用水は地下へと消えました。この桜川の写真も、暗渠となる直前に撮影されたものです。

四ツ谷用水は地下を流れる暗渠となりましたが、防火消防用水や仙塩工業地域における工業用水として利用されるなど、今でも仙台の暮らしを支えています。仙台の歴史とともに歩んできた水の流れは、今も続いているのです。



『明治元年現状仙台城市之図』（仙台市博物館所蔵）　画面を斜めに走る北六番丁に四ツ谷用水の橋が描かれている（矢印）

“せんだい”の原風景を訪ねて

仙台市の歴史といえば、仙台城跡を代表に、仙台駅の西側が注目されがちです。
ですが、東側にも豊かな歴史がありました。
今回は、そんな市域の東部や東南部の歴史を探ってみます。

アエル最上階から東を望む

1 長町・利府断層を境にして

仙台駅から宮城野原公園総合運動場へ向かう途中、あるいは産業道路を沿岸部へ向かう途中、長い坂があることにお気づきでしょうか。若林区の荒町から三百人町にかけての辺りも同様です。この傾斜は、市域を南北に貫く長町・利府断層が、付近を走っている影響です。

私たちは、この断層の西側に市街地をもつ仙台に住んでいますが、一帯は土地が高くて水利が悪いため、伊達政宗が仙台城下町を開くまでは、大きな集落はなかったようです。

断層の東側はどうでしょう。若林区の南小泉には弥生時代以来の集落が広がり、遠見塚には市内最大の古墳があります。太白区郡山には8世紀前半の国府の跡とされる郡山遺跡があり、若林区木ノ下には陸奥国分寺跡もあります。仙台開府以前のおもな遺跡は、断層の東側に集中しているのです。

このように、断層の西側に重心をもつ仙台は政宗以降のこと。これ以前の歴史は断層の東側に凝縮されているのです。

長町・利府断層による地表面の高低差(若林区南鍛冶町付近)
左手(西)の地表面に比べ右手(東)の地表面が低いことがわかる

仙台市域における長町・利府断層と古代・中世のおもな遺跡の分布

2 カヤの木は見た？

中世の陸奥国(東北地方太平洋側)には、奥大道(おくだいどう)などと呼ばれる南北の縦貫道路が走っていました。市域では、太白区柳生から大野田・長町を経由し、榴ケ岡と陸奥国分寺のあいだを通って宮城野区の岩切へ、という経路をたどります。

平安時代末の文治5年(1189)、源頼朝が奥州藤原氏を滅ぼした奥州合戦では、頼朝自ら奥大道を北上しており、市域東南部の奥大道沿いには関連する伝承が多く残っています。頼朝方の武将が勝閧(かちどき)をあげながら引きあげてきた榧木屋敷(かやのき)(太白区柳生)、敗北した藤原氏の家臣が退いてきた栗木屋敷(太白区西中田)や、藤原氏の家臣が射殺(いころ)された鎧淵(よろいぶち)(太白区根岸町)のほか、榧木屋敷とされる場所に立つ推定樹齢1300年以上のカヤの大木は、源頼朝が馬を繋いだとも伝えられています。

時代が下って16世紀末、葛西・大崎一揆の際には、豊臣秀次や徳川家康、石田三成らがこの道を通って一揆の鎮圧に当たっています。

奥大道は陸奥国で何か起これば必ず用いられる道。教科書を彩る有名人たちがこの道を行き交う姿を、柳生のカヤの木は見ていたのかも知れません。

奥大道の経路と奥州合戦の伝承
(大正10年発行 20万分の1地勢図に加筆)

柳生のカヤ　推定樹齢1300年は市内最古で、市の保存樹木にも指定されている。

3 古代と近世が接する場所

若林区役所前を東西に走る県道235号は、荒町と荒浜方面とを結ぶ、区内の幹線道路です。実はこの一帯は、県道を境に北と南で街並みの様子が異なっており、北側は町の区画の南北方向が真南を向いているのに対し、南側は北東から南西へと少し傾いています。

周辺を上空から見てみましょう。南側の傾きは宮城刑務所と一致しています。ここは、もともと伊達政宗が晩年を過ごした若林城で、一帯はその城下町でした。南側の傾きは、若林城の城下町の名残ということになります。対して県道の北には、真南を向く陸奥国分寺跡があります。周辺には真南を南北方向の軸にした条里制の地割りも確認されており、県道北側の区画の向きは、陸奥国分寺を基準にした奈良時代の開発の跡が影響しているようです。

若林区の東西を結ぶ県道235号は、奈良時代の影響を残す町と、伊達政宗が創った町が接する場所でもあるのです。

昭和22年(1947)の航空写真に見る陸奥国分寺跡・若林城跡付近

第32回配本 年表・索引

A5判(2冊組)　年表 138頁／索引 272頁
本体価格2,000円(税別)

通史編で取り上げた歴史事象を中心に仙台の歴史を年表化。
索引は通史編の総索引に加え、特別編「自然」「美術工芸」「市民生活」「民俗」「慶長遣欧使節」の索引を収録。さらに、全32巻の総目次も掲載。

仙台の歴史を掘り下げる
「仙台市史」全32巻堂々完結！

仙台市史は市制百周年記念事業として編さんが行われ、平成6年から刊行が開始されました。原始から平成元年に政令指定都市となるまでの事象を扱い、最新の研究成果を盛り込んだ内容になっています。
「通史編」9巻のほか、古代から現代までの歴史資料で構成される「資料編」13巻、関心の高いテーマを詳しく取り上げた「特別編」9巻に「年表・索引」1巻を加え、全32巻を刊行、このたび完結いたしました。

通史編　1原始 ※改訂版とセット販売になります　2古代中世　3近世1　4近世2　5近世3　6近代1　7近代2　8現代1　9現代2

資料編　1古代中世　2近世1藩政　3近世2城下町　4近世3村落　5近代現代1交通建設　6近代現代2産業経済　7近代現代3社会生活　8近代現代4政治・行政・財政　9仙台藩の文学芸能　10伊達政宗文書1※完売しました　11伊達政宗文書2　12伊達政宗文書3　13伊達政宗文書4

特別編　1自然　2考古資料※完売しました　3美術工芸　4市民生活　5板碑　6民俗　7城館　8慶長遣欧使節　9地域誌

年表・索引

通史編／2,858円(税別)
資料編／3,810円(税別)
特別編／5,714円(税別)※板碑のみ4,762円(税別)
年表・索引／2,000円(税別)

県内主要書店、仙台市博物館でお求めになれます。
配送をご希望の方は、電話・FAXで㈱宮城県教科書供給所へお申込みください。

発売元／㈱宮城県教科書供給所
〒983-0034 仙台市宮城野区扇町一丁目6-3
TEL 022-235-7181　FAX 022-235-7183

お問合せ先／仙台市博物館情報資料センター
〒980-0862 仙台市青葉区川内26
TEL 022-225-3074

「せんだい市史通信」は今号をもちまして終了いたします。

せんだい市史通信 第35号
発行年月日／平成27年3月10日
編集・発行／仙台市博物館市史編さん室　TEL／022-225-3074
〒980-0862　仙台市青葉区川内26　URL http://www.city.sendai.jp/kyouiku/museum

このリーフレットはリサイクルできます。「雑がみ」へ分別しましょう。